

Mozambique

【モザンビーク】

写真・文＝谷本 美加（写真家）

海の恵み



たいていの漁師は、夜明け前に漁に出て午前中に仕事が終わる。午後の浜辺には帆をたたんだ漁船が静かに停泊している



a



b

a.魚、エビ、カニ、貝などが並ぶマプトの魚市場。奥にはシーフードレストランもある
b.水揚げ作業をする少年。魚を運んだ後に船の掃除をして一日の仕事が終わり、深夜には再び漁に出る

 地球ギャラリー vol.44

まだ朝6時だというのに、大勢の人が浜辺に座って海を眺めていた。モザンビークの首都マプトの中心地から車で15分ほど離れた浜辺。浅瀬には何艘もの小さな漁船が停泊し、漁師たちが仕事をしている。

しばらくすると停泊している漁船から少年が飛び降り、重そうなケースを運んできた。浜辺にケースの身をザッと広げる。10センチほどの小魚だ。人が集まり、その場で品定めが始まった。「小さい、小さい。フィッシュカレーを作るのに、これじゃあ……」と、不満げな声が聞こえてくる。静かだった浜辺がにぎわい始め、1時間もたたないうちに、捕れたばかりの魚やカニ、エビが、あちらこちらに水揚げされていく。

季節にもよるのだろうが、いずれも小ぶりなものばかり。もちろんマプトの東に広がる海には大きな魚もいる。実際、魚市場には鯛のような大ぶりの魚やロブスターが並ぶ。しかし、木製の小舟を使った小規模な漁では、そうそう大きな獲物が網にかかるわけではない。



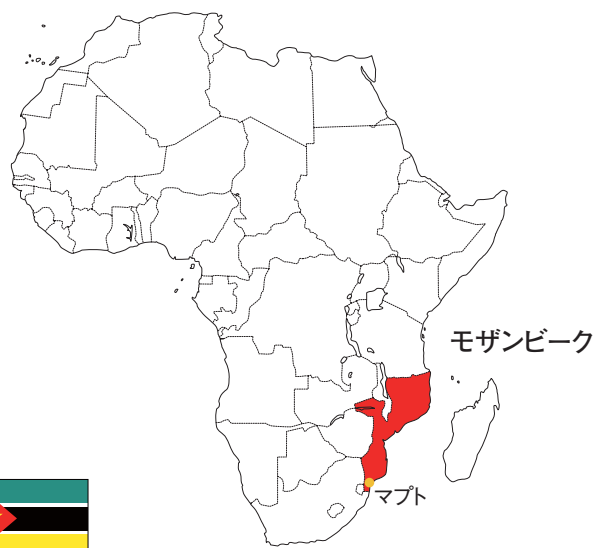
漁の戻りを待つ人々。遠浅の海岸では、船上で漁師たちが水揚げの準備をしている

漁から戻り浅瀬に着くと、人力で漁船を運び浜辺に寄せる



販売用にまとめ買いをする人から、夕飯用に数匹だけ買う人までさまざま





首都：マプト
面積：79.9万km²(日本の約2.1倍)
人口：約2,339万人(2010年)
言語：ポルトガル語
宗教：キリスト教、イスラム教、原始宗教
1人当たり国民総所得(GNI)：440ドル(2010年)
経路：直行便はなく、ヨハネスブルグなどでの乗り継ぎが一般的。
通貨：メティカル(MZN) 1MZN=約2.95円(2012年4月現在)
気候：南部は亜熱帯性気候、中部と北部は熱帯性気候に属する。
10～3月は雨期で高温多湿、4～9月は乾期で比較的涼しく過ごしやすい。



ごくわずかだが夕方から漁に出る漁船もある



小魚を売りながら算数の勉強をする女性。「子どもの教科書を借りているの」

浜辺の前の路上には、魚介や肉、野菜、日用品などを売る青空市場がある。小魚を売る女性に値段を聞くとうと声をかけたのだが、ひざの上のノートに夢中で耳に届かない。慣れない様子で分数の引き算をしている。年齢は20～30代半ばだろうか。脇に小学生の算数の教科書が置いてある。思わず、「何で？」と日本語で声をかけると恥ずかしそうに笑って顔を上げた。

「私、学校に行けなかったから」

モザンビークは、独立後17年続いた内戦が1992年に終わり、現在、首都の中心部には高層ビルが建ち並んでいる。しかし、同じ首都でも漁師たちの生活は発展とは程遠い。女性や子どもたちは水くみが毎日の日課で、家には魚を保存する冷蔵庫もない。内戦の影響もあるだろうが教育を受けていない人が多く、貧困からなかなか抜け出せない。そうした人々は、海の恵みに頼るしかないのだ。

浜辺が静まり返った夕方5時過ぎ、漁の準備をする漁船が一艘だけあった。船主が網を整えながら「この時間の方が捕れることもあるんだよ」と言う。エンジンを取り付け、ガソリンを積んだ。いざ出漁という時に女性が増えて、バケツのような形の大きな布包みを船主に渡した。その包みは弁当で、たっぷりのごはんを焼いた小魚が入っていた。手渡したのは算数の勉強をしながら小魚を売っていた、あの女性だった。



首都マプトの中心部は高層ビルが建ち並び交通量も多い



浜辺近くの水源で水をくみ、自宅へ運ぶ女性や幼い子どもたち

モザンビーク料理 ココナツミルクで煮込んだ 「ピーナツチキンカレー」



2,500キロにも及ぶ長い海岸線と肥沃な大地を持つモザンビークでは、魚やカニなどの海産物のほか、鶏肉や牛肉、野菜など、さまざまな新鮮な食材を手に入れることができる。また旧宗主国であるポルトガルの影響を受け、トウモロコシやコメ、ソルガム、カシューナッツなど同国から伝わった食材が多く、また味付けにはニンニクやレモン、タマネギ、チリペッパー、ローリエ、ゴリアンダーがよく使用されるのが特徴だ。

また、モザンビークの食文化に欠かせないのはキャッサバ。マンディオカと呼ばれるねばりけのある根だけでなく、葉もよく食べられる。細かく葉をすりつぶし、ピーナツとココナツミルクで鶏肉や牛肉、魚、野菜などと煮込んだシチュー「マタッパ」は、代表的な伝統料理の一つだ。

「ピーナツチキンカレー」は、カレーといってもスパイスは使わず、ピーナツとココナツミルクで鶏肉やエビなどお好みの具材をことごと煮込む。モザンビーク全土でよく食されているトウモロコシの粉をお湯で練って蒸した主食「シマ」にからめて食べると相性が良く、満足感もたっぷり。



トウモロコシの粉にお湯を加え、火にかけながら練って作る主食「シマ」

【材料(6～8人前)】
鶏1羽／ピーナツ2分の1カップ／ココナツミルク400ミリリットル／タマネギ2分の1個(みじん切り)／トマト1個(みじん切り)／チキンスープのもと1個／塩少々

【作り方】

1. ピーナツをミキサーなどで細かくすりつぶし、適量の水を少しずつ加えてペースト状にする。
 2. 1にココナツミルク、タマネギ、トマトを加え、塩で味を付けたら弱火にかけ、よくかき混ぜながら4～5時間煮込む。
 3. 鶏肉を骨付きのまま小分けにし、チキンスープのもとと水であえたら15分ほど焼く。
 4. 3を2に加え、弱火でさらに1時間半煮込み、十分とろみが出たら出来上がり。
- ☆煮込んでいる途中で浮いてくるピーナツ油を取り除くのがポイント。

編集協力：駐日モザンビーク共和国大使館



[上] JICA専門家とモザンビーク農業省の研究者が協働で土壌や作物の生育状況を調査。その結果を栽培方法の改善に生かしていく

[下] JICAの支援で建設されたクアンバ教員養成校で、質の高い教育を提供できる教員の増加を目指す

ナカラ回廊への支援で 資源産業と農業の発展を

豊富な天然資源と、農業に適した肥沃な大地を有するモザンビーク。その特性を生かし経済発展と人々の生活向上を図るべく、JICAは北部のナカラ回廊周辺地域で包括的な支援を進めている。

17年にもおよんだ内戦が1992年に終結したモザンビーク。その後、政府による財政・税制改革が功を奏し、2000年代以降は6～8%の経済成長率を順調に維持している。しかし、いまだ国家財政の約4割を海外からの支援に依存しており、産業もアルミ精錬など外国資本による大規模な資源開発プロジェクトに限られている。また、人口の約8割が農業に従事しているものの、そのほとんどが安定した収入が得られない小規模農家。この現状を改善し、彼ら自身の手で自立した国づくりを進められるよう、JICAは農業開発などを通じて新たな産業創出による経済発展と雇用促進を図り、貧困削減に貢献するための支援を展開している。

その中で特に重点を置いて取り組んでいるのが「ナカラ回廊開発プログラム」だ。北部一帯のナカラ回廊周辺地域には広大な農業適地が存在するほか、品質の高い石炭など豊富な地下資源が埋蔵されている。世界第2位の埋蔵量といわれる天然ガスの開発も、昨年から始まったところだ。JICAは「日本・ブラジル・モザンビーク三角協力※」によるアフリカ熱

帯サバンナ農業開発(ProSAVANA-JBM)」と、同地域の道路、港湾、橋、学校など「社会経済インフラ開発」を二本柱に、ナカラ地域が「経済回廊」として発展・成長することを目指して支援を行っている。

この三角協力で生かされているのが、70年代、作物栽培に不適とされていたブラジルのセラード地域開発の経験。日本は土壌改良や灌漑設備の整備、品種改良、入植事業に対する資金協力・事業実施管理などを支援し、同地域を大豆や野菜などの一大生産地に変ぼうさせた歴史がある。ブラジルとモザンビークは共にポルトガル語圏であり、対象地域の緯度がほぼ同じで気候も似ていることから、セラード開発の経験をモザンビークの農業開発に応用していく。具体的には、大豆、キャッサバ、トウモロコシのほか、商品作物である綿花やカシューナッツの生産性向上や新規品種の導入に向け、農業研究者の育成や研究施設整備、回廊沿線のモデル地域での計画づくり、品種選定や栽培方法の構築、農業技術の普及をブラジル人と日本人専門家が協働で行っている。こうした協

地球ギャラリー vol.44

JICAの活動

in モザンビーク



アフリカ東岸の天然の良港であるナカラ港。今後日本からの支援を経て、地域の貿易の拠点となることが期待される

力を通じて、モザンビーク国内での食料問題の解決のみならず、世界全体の食料安全保障への貢献を目指す。

さらに、民間投資を呼び込むために必要なのが地域開発。内陸部から沿岸部への物流を円滑に進めるべく、この地域を東西に結ぶナンブラークアンバ間など、複数の道路の建設が円借款で進められている。また、回廊と海外のゲートウェイであるナカラ港の改修・拡張工事が完了すれば、ナカラ回廊から最も近い港として、鉱物資源や農作物などの流通・輸送環境の改善への貢献が期待される。これに加え、貧困層の生活向上に直結する社会インフラの整備も並行して行われている。教育分野では中学校や教員養成学校の建設、また保健分野でも保健人材育成のためのインフラを強化していく計画だ。給水・衛生分野では、中部ザンベジア州での協力の経験を生かし、回廊が通るニアッサ州で住民主体で行う給水施設の維持管理を支援していく予定だ。

※日本とパートナー国が技術やノウハウなど双方の強みを生かし、協働で第三の受益国に対する協力を実施すること。



[左] 教育や保健・衛生分野で青年海外協力隊が活動し、草の根レベルからナカラ回廊地域の開発を支えている

[右] 地域経済の発展には欠かせないナンブラークアンバ間の道路。アスファルトで舗装されれば、ヒトやモノの移動が飛躍的に向上する